

061 洗礼者ヨハネとイエス(2)

(マタイによる福音書 11 : 1~19、ルカによる福音書 7 : 18~35)

01 イエスは十二人の弟子に指図を与え終わると、そこを去り、方々の町で教え、宣教された。

02 (洗礼者) ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、
03 尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」

04 イエスはお答えになった。

「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。05①目の見えない人は見え、②足の不自由な人は歩き、③重い皮膚病を患っている人は清くなり、④耳の聞こえない人は聞こえ、⑤死者は生き返り、⑥貧しい人は福音を告げ知らされている。06 わたしにつまずかない人は幸いである (→メシア宣言)。」

→旧約聖書に記されているメシア預言 イザヤ書 35 : 5~6、イザヤ書 61 : 1

イエスによる洗礼者ヨハネに対する評価／イエス、先駆者ヨハネを賞賛する(7~15 節)

07 ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。

「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。(違うでしょう。) 08 では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。(違うでしょう。) しなやかな服を着た人なら王宮にいる。

09 では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。(洗礼者ヨハネは、風に揺れる葦ではないし、柔らかい着物を着た者でもない。ヨハネは) 預言者以上の者 (、メシアの先駆者) である。

10 『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、／あなたの前に道を準備させよう』／と書いてある (→出エ 23 : 20、イザヤ 40 : 3、マラキ 3 : 1、マルコ 1 : 2、ルカ 7 : 27) のは、この人 (洗礼者ヨハネ) のことだ。

11 はっきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。

しかし、天の国で最も小さな者 (→新約時代の聖徒たち) でも、彼よりは偉大である。

→ヨハネは、旧約時代最後の預言者で、旧約時代の聖徒たちの中で最もすぐれた者である。

→天の国で最も小さな者

ヨハネに先立つすべての預言者は、キリストはやがて来ると預言しただけでした。しかし、ヨハネはキリストを自分の目で見ました。ヨハネは受肉したキリストを見て、人々に紹介しましたが、自分の内に内住する、復活したキリストを持っていませんでした。しかし、天の国 (王国) の民は、自分の内に内住する、復活したキリストを持っています。ヨハネは、「ここにキリストがおられる」と言うことができましたが、天の国 (王国) の民は、「わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。」(フィリピ 1 : 21)とすることができます。ですから、天の国 (王国) で最も小さい者も、彼よりは大きいのです。人が大きいか小さいかは、その人とキリストとの関係にかかっており、キリストに近ければ近いほど、その人は大きいのです。

12 彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている。

→ヨハネが教えを宣べ伝え、バプテスマ (洗礼) を授け始めてから現在まで、多くの熱心な人々が天国を目指して押し寄せました (リビング・バイブル)。

→ (ルカによる福音書 16 : 16) 律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている。

※12 節の聖句は、ファリサイ派にある行い (バプテスマのヨハネの日から今に至るまで、ファリサイ派は、人々が天の王国に入るのを激しく妨害してきた) のように、神の国に入ることは激しく妨害されるとネガティブ (否定的) に解釈することも出きますが、ここではポジティブな解釈を選択しています。

13 すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時（→ヨハネは旧約時代の最後の預言者である）までである。14 あなたがたが認めようとするれば分かることだが、実は、彼は現れるはずの（神の力と教えを授かった）エリヤ (Elijah)（のような人物）である。15 耳のある者は聞きなさい。

→マラキ書 3：23 は、「見よ、わたしは／大いなる恐るべき主の日が来る前に／預言者エリヤをあなたたちに遣わす」と、エリヤが来ることを預言しています。洗礼者ヨハネは、「エリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」と、母の胎内にあった時からエリヤの霊と力をもって主に先立ち行く、と言われました(ルカ 1：17)。

16 今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。17『笛を吹いたのに、／踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、／悲しんでくれなかった。』18 ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、19a 人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。→根拠も対論もなく、何に対しても、ただ批判（中傷）するだけの人間は何処にでもいる。そして、このような人たちを満足させるのは難しい。

19b しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される（→そうはいうものの、賢いあなたがたのことだから、上手につじつまを合わせるでしょうが、知恵が正しいかどうかは、その行いによって証明されるのです。）」

【参考】 マラキ書 3:23~24

見よ、わたしは／大いなる恐るべき主の日が来る前に／預言者エリヤをあなたたちに遣わす。彼は父の心を子に／子の心を父に向けさせる。わたしが来て、破滅をもって／この地を撃つことがないように。

→死を経ないで天に上げられた預言者エリヤは、BC9 世紀頃の預言者で、ユダヤ人たちは、エリヤが大苦難（患難）時代の前に再臨して裁きの日あるいはメシア到来の準備をすると考えた（マタイ 17：10～12、マルコ 9：11～13）。

→エリヤの到来→携 挙→大苦難（患難）時代→イスラエルの民族的救い→メシアの地上再臨

→過越祭では、エリヤの席が用意され、食事の後、エリヤの杯にぶどう酒を注ぎ、玄関の窓を開ける。

【参考】 マンダ(マンダヤ)教(=マンダイズム、マンダニズム) →キリスト教の異端、カルト集団

グノーシス主義^{※1}の一つとされる宗教で、「マンダ (manda)」とは「知識、認識」（ギリシア語：「グノーシス」）を意味する。創始者はザザイ (Zazai-d-Gawazta: 一～二世紀頃) とされ (マンダ教の伝承)、日曜日を安息日とする。特にイエス・キリストの先駆者 (先達) である洗礼者ヨハネを指導者と仰ぐ (アダム、アベル、セト、エノシュ、ノア、シェム、アラムを敬い、アブラハム、モーセ、イエス、ムハンマドは闇の世界から送られた偽の預言者として拒否する) ことから、ヨルダン川との繋がりが指摘され、キリスト教の起源に近接したものとして注目される。日常的にはアラビア語を用いているが、宗教文書は全てマンダ語で書かれている。イラクの南部に信者 (マンディーン) が現存し、またアメリカ合衆国やオーストラリアにもコミュニティが存在する。信者数は、約 5 万から 7 万人と推定される。現在のイラク情勢に関する文脈で登場するサービア教徒は、おおむねマンダ教徒のことである。

※1：グノーシス主義：人間はある「霊知」（グノーシス）を持つことによって救済されると教える。世界を創造したのは絶対者としての神ではなく、より下級の造物者であり、そのため物質界は罪悪性を持っている。人間が罪ある者である理由は、肉体を持っているからであるとする。神が万物の創造者である、イエス・キリストは受肉した神の御子である、人間は恵みと信仰によって救われるというキリスト教の教えを全否定する。